

# 私の「春はあけぼの」を書き下す (五年)

筑波大学附属小学校教諭

青山由紀

## 1 はじめに

『枕草子』の魅力の一つは、作者である清少納言のものの見方・考え方のおもしろさにある。第一段「春はあけぼの」はそれに加え、情景描写や文体の美しさが際立っているように思う。小学校五年生の子どもたちには、まず、この作品世界を存分に味わわせたい。それには、ただ声に出すだけでなく、情景を頭の中に思い描きながら音読・暗唱することが欠かせない。それにより、この美しい言葉の響きやリズムをより深く体感させることができるはずだ。現代にも四季折々の美しさはあり、子どもたちにも、自分なりの「をかし」を感じる物事がある。それらをもとに自分流『枕草子』を書く(翻作する)ことで、本作品の内容・表現の特徴や、自分と清少納言の見方・考え方の違いに気づくことができるだろうと考えた。

## 2 指導計画 (全四時間)

### ■目標

○音読・暗唱をすることで、歴史的仮名遣いや古典の語句に慣れ親しみ、内容の理解を深める。

○翻作することを通して、自分と昔の人とものの見方・考え方の違いに気づく。

### ■展開

**第一時** 現代語の「おかしい」の意味を考え、『枕草子』に興味をもつ

・マッピングを使って、「おかしい」の意味を整理する。

・「おかしい」を国語辞典で引き、古典語(文語)の「をかし」の意味に気づく。

### **第二時** 『枕草子』第一段を読む

・「春」「夏」の原文を音読して、歴史的仮名遣いについて理解し、書かれている内容を確かめる。

## 3 指導の工夫・学習の実際

**①意味の違いから興味を喚起する(第一時)**  
古典語の「をかし」は、現代語の「おかしい」と音や形のうえでは似ているが、微妙な意味合いは異なる。授業では、その違いに着目させることで、古典への興味を喚起したいと考えた。そこで、「おかしい」

を中心語として、その意味についてマッピングで整理していった。

その後、各自の国語辞典で「おかしい」の意味を確かめたところ、「をかし」に触れたり、『枕草子』につなげたりして解説する辞書があった。子どもたちは、「『おかしい』と違って、『をかし』にはよいイメージの意味しかないようだ」「『枕草子』とは何か」などと、「をかし」という言葉や『枕草子』に興味を寄せていった。このように、関心が高まってから作品に出会わせただけで、彼らは、清少納言のものの見方・考え方に自然に着目し、楽しんでいたように思う。

### ②続きを予想した後に読ませる(第二時)

第一段の「春」「夏」を読んだ後、その続きを予想してから「秋」「冬」を読むようにさせた。これは、一度立ち止まって考えることで、内容や表現の特徴に気づいたり、「自分だったら」という思いをもって読んだりしてほしいという意図による。

「春」「夏」を読んだところで、子どもたちからは、次のような発言があった。

- ・この後に「秋」があるはず。
- ・秋は○○○で始まる。
- ・「○○」には、時間を表す言葉が来る。

## 4 おわりに

・「をかし」を使う。

・数を重ねる表現が使われている。これらはそのまま、自分流『枕草子』を翻作するときに押さえるべき特徴となるが、この全てを翻作の条件とするのは難しい。今回の授業では、次の二点を条件とした。

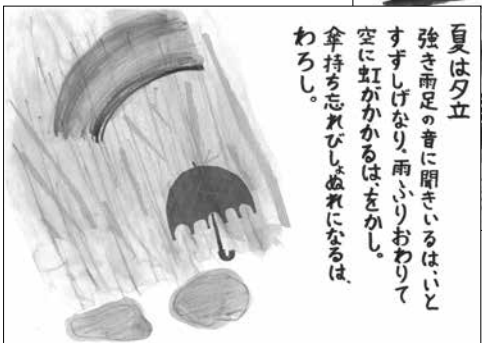
- ・「春は○○○」と、体言止めで始める。
- ・「をかし」を使う。

中学生には、また違った読み方・感じ方ができることだろう。

人生の中で何度も違った楽しみ方ができるのが古典のよさである。小学校は、その幸せな出会いをつくる段階であるという思いをもち、古典の授業に臨んでいる。(談)



▲自分流『枕草子』の作品例。時間に余裕があれば、文章に合った絵を添えるのもよい。



夏は夕立  
強き雨足の音に開きいるはいと  
すずしげなり、雨ふりおわりて  
空に虹がかかるはをかし。  
傘持ち忘れびしぬれになるは  
わろし。